

黄色い光に包まれた幻想的な風景を呆然と見つめていた私はハッと我に返った。いつまでも眺め続けていたかったが、今は一刻も早く宿を見つけなければ、高度4000メートルの林の中で路頭に迷ってしまうのだ。私はきびすを返すと再び来た道を一心に駆け戻った。

もう足がガクガクだった。息を切らしながら花園の広場に戻ると、ウィンが先程の様子のまま座り込み膝を抱えてうずくまっているのが見えた。

何で私一人がこんなに走り回らなきゃなんないのよ～!! 内心、舌打ちしたい気分を抑えて、彼女の肩を揺らすと林の向こうに聳えているオレンジ色の光をまとった央邁勇^{ヤンマイヨン}を指差して見せた。

「ウィン!! 見てみなよ!!」

話しかけても返事をする気力さえ無くしたようにノロノロと無表情に顔を上げたウ

ィンは、夕日に輝く央邁勇の姿を捉えるとパッと表情を輝かせた。

「うわああ～!! 綺麗!! いつから見えていたのかな。私全然気づかなかった」

「ねえウィン、この先に宿は無かったの。私達ここに来るまでに通りすぎて来たみたい。私はちょっと戻って様子を見てくるからあなたはここで待っていて」

少しは気力が戻った様子^{ルオロンニウウチャン}のウィンに少しホッとすると、私は再び彼女を広場に残したまま洛絨牛場の方向に林の中の道を駆け込んで行った。林の中は道が薄暗くなるので余計に気持ちが焦ってしまう。走りながら必死に考えをめぐらせた。道は一本道のはずなのに、何で宿は見つからなかったんだろう・・・

途中林が切れて、再び小さな広場になっている場所に出た。何気なく見上げた道の上の方に屋根のようなものがかすかに見えていた。「あ!!」山の斜面を登りながら近寄ってみると泥とわらと石で固められたような小さな小屋

の屋根から煙が上がっているのが見えてきた。

「あ～!! あそこだあ～!!」

山の斜面には先程の洛絨牛場にあったのと同じような、牛番小屋が建っていた。洛絨牛場からこちらまで道は一本道だが、所々で山の斜面の上段と下段に平行に枝分かれしている箇所があったのだ。先ほど下段の道を歩

いていた私達からは、上段の道の上方に建っている小屋は完全に死角に入ってしまった見落とししてしまったと言う訳だ。

「やった～!! みつけたああ～!!」

嬉しさのあまり思わず叫び声をあげると息を弾ませながら小屋に駆け込んだ。

「你好!! 今夜ここに泊めてもらえる!?!」

小屋の中には薄汚れた服を着たパツとしない感じの男が二人、突然飛び込んで

きた来訪者に驚きの表情を浮かべていた。

「ねえ! 宿はあるの!?!」

彼らは我に返ったようにすかさず聞いた。

「いくら?」

「30元だ」

「高いわよ! まけてくれるんでしょ? 私と友達二人なのよ」

「じゃあ 20元でいい」

「良かった! ありがとう～!!」

あわや路頭に迷うところをギリギリで間に合った喜びと安堵感で一杯だった私は、先程の洛絨牛場^{ルオロンニウウチャン}の小屋よりも宿代が10元値上がりしている事も気にとめなかった。これでやっと落ち着ける。良かった。本当に良かった～

「さっき私の友達がここに来てお茶を飲んだと思うんだけど。香港人の男女二人よ。」



夕日に輝く央邁勇の雄姿

「ああ、来たよ」と男達は頷いた。

彼らの身なりは客観的に見て、これまで出会ってきた村人よりも貧しげだった。

洛絨牛場の宿は無いけど在る・・・なんだか釈然としなかった話の結び目がようやく解けたような気がしてきた。きっと彼らは現金が欲しいのだ。先程洛絨牛場で会った旅行者もアーロン達も、今日の午後にすれ違った旅行者の女性も、道を歩いていると泊まらないかと呼びかけられたと言っていた。

牛飼の彼らは、馬方など直接観光客にかかわって生計をたてている村人に比べれば現金収入はずっと少ないのだろう。小屋の前を通りかかる観光客を呼び込み、泊らせるだけで簡単に現金が手に入るのは簡単で美味しい商売だ。こんな小屋で20元とは法外な料金だが、他に泊まる場所のない人間の足元をみて吹っかけているのだろう。

わざわざこの小屋を探して歩いて来たというのに、不幸にもたまたま男達の目の届かない下の道を歩いていた私達だけが呼びとめてもらえなかったというわけだ。

男達にお茶をすすめられ、そのまま温かく燃える囲炉裏のそばでくつろぎたかったが、急いで花園広場に戻ってウィンを連れてこなければならなかった。ああ～、もう！一人だったら楽だったのに～！！世話が焼けるったらありゃしない。これだから女は嫌なんだ！

私は自分の性別も忘れて心の中で舌打ちをしながらも、宿が見つけれられた嬉しさに、そろそろ限界に来ている足の疲れも忘れて再び林の中を花園広場に向かって駆け戻った。良かった良かった。安堵感と喜びが込み上げてくる。これでウィンも喜ぶだろう。息を切らしながら花園広場に駆け戻るとウィンに向かって笑顔で叫んだ。

「ウィン！！見つけた！見つけたよ！！私達やっぱり通り過ぎていたの！！」

「どんな宿？綺麗！？」

「ううん、洛絨牛場のと同じような牛番小屋」

私が答えにウィンとはとんに顔を曇らせた。

「ええ～、ちゃんとした宿じゃないのお～！」

まったくこの期に及んで何言ってるんだらう。彼女は自分の置かれている状況がわかっているのだろうか。

「小屋の人はどんな人？」

「男の人が二人」

「ええ～！！私達は女だよ！男しかいない宿になんて泊まれる訳ないじゃん！！」

私は少し驚いてしまった。先ほどは必死だったので、そんな事は考えもしなかったのだ。

だが、必死に走り回って見つけてあげた宿に不満ばかり言っているウィンには腹が立った。いったいここを何処だと思っているのだろう。綺麗な宿にしか泊まりたくないのならそれなりの観光地へ行けばいい。アーロン達と稲城に帰るか、一人で沖古寺に泊まれば良かったのだ。私は一緒に来てくれと頼んだ覚えはない。

「彼らはお金が欲しいだけよ。今更ゴチャゴチャ言ってる暇なんか無いのよ！！それじゃあ、このままここに寝るつもり！？冗談じゃないわ」

いいかげん、ムツとしてきた私は有無を言わずにその場に置いてあった自分の大きなザックを背負い上げ小さなザックを胸にかけると歩き出した。朝からあんたの三倍以上の荷物を背負って歩いてきた私が、どれだけ走り回ってあの宿を見つけてあげたと思ってるの！？全く女って面倒だ。再び自分の性別を忘れて心の中で毒づいていた。

「だって、さっきアーロンはいい家だって言ってたのに・・・ねえ、他に別の宿があるんじゃない？」

ウィンはまだ未練がましくもっと綺麗な宿を探したいなどと言っている。私は苛立ちを押さえきれない口調でウィンに言った。

「あんた二日も一緒にいて、まだアーロンの性格わかってないの！？

アーロンはね、自然の中で暮らす土地の人間や生活が好きなのよ！！どんな家だって招かれてお茶をご馳走になったりしたら良い家だって言うわ！これ以上いくら探したってこんな山奥に普通の宿なんてある訳無いでしょう！！」

「だったら、さっきの洛絨牛場の小屋の方が良かった。あっちは女の人だもの」

この言葉には思わずカッと頭に血がのぼった。

「私はあそこの小屋でいいって言ったのに、誰が他の宿を探したいって言ったのよ！！あんたは疲れたって座ってただけだけど、私がどれだけ大変だったと思ってるの！！私だって疲れたわ！これ以上もう動けないわよ！！」

私の怒りを感じて抵抗力を弱めながらも、ウィンはまだ男だけの小屋なんて嫌だとグズグズ言っていた。

「彼らはお金が欲しいだけよ！！私達には何もしやしないわ！！」

「友達を連れてきたわよ！！」

先程の小屋に戻り男達が入れてくれたお茶を飲みながら、私達は囲炉裏端に座ってポツポツと会話をした。先ほどあは言っただけで強引にウィンを連れてきたものの、私もこの男達に対してどこか好印象を抱けずにいた。ウィンが危惧しているような危機感を感じられなかったが、旅行者から金銭を得ようという心持が男達から素朴さを失わせているからなのだろうか。だがもう選択の余地もない。ただ一晩ここで眠るだけだ。

「私達はどこに寝るの？」と男達に尋ねると、少し離れた場所に建っている離れのような小屋に連れて行かれた。

「えええ～！？ここに泊まるのお～！？」小屋をみたとなんか私達は思わず声を上げてしまった。

洛絨牛場で連れて行かれた離れの小屋は物置小屋だったが、こちらは完全に廃屋だ。屋根と扉の一部は朽ち落ちて、すでに半壊している状態なのだ。これでは日が落ちれば急激に冷えこんでくるであろう外部の気温を遮断することもできないし、雨が降れば壊れた屋根から雨水が吹き込んでくるだろう。こんな場所をあてがうだけで一人30元も吹っかけていたとは呆れてしまう。

30元といえば私が康定で泊まった宿の値段と同じだった。バスターミナルの目の前という利便性の高い場所に在る宿のシングルルームだ。セミダブルのベッドにテレビ。共同ではあるがお湯の出るシャワーもあった。地方の田舎町といえこの亜丁から比べれば康定は大会場である。

貨幣価値の落差も含めて考えれば、彼らはどれだけ外な値段を吹っかけているのだろう。改めて亜丁の村人の心持が金銭欲で荒んでいるのを感じ、思わず心がスッと冷えるような気分になった。

「こんな場所には泊まれないわ。あなた達の小屋の方に泊めてよ」

だが、男達は首を振った。もういい。たった一晩だけのことだから。私も疲れきって投げやりな気持ちになっていた。男達が去っていくと、朦朧とした様子でウィンが言った。「私、本当に疲れた。お願い、少し眠らせて・・・」

私がザックからシュラフを取り出してウィンに与えると、使い方を知らないというウィンに中にもぐるように説明した。糞虫のようにシュラフにくるまったウィンは「こ

んな風に寝るのは始めて。気持ちいいね」と少し笑顔をみせるとすぐに眠ってしまった。

それにしても、こんな宿を友人に勧めるなんてアーロンのお人好しにも呆れてしまう。さっきは腹を立てていたが、シュラフにくるまって眠っているウィンを見ていたら急に可哀相になってしまった。すぐにおかしな冒険に首を突っ込みたがる私とは違い、彼女は普通の旅行好きな女の子なのだ。彼女の言っていることは決して我儘ではなく、当たり前な事ばかりだろう。たまたま私と出会ったために、こんな目にあって・・・

そう思ったとたん、急にウィンが言っていた言葉が気になり始めた。先程は走り回った労力を否定された怒りと疲れて聞く耳をもたなかったが、私はいったい何を根拠に大丈夫だと決めつけているのだろう。あんなに嫌がっていたウィンを無理やりここに連れてきて万が一何かあったりしたら、私は自業自得だろうが彼女に対してどう責任をとればいいのか。そう思った瞬間、私の心は決まっていた。

表に出ると辺りは薄桃色に染まり始めていた。外で家畜の世話をしている男達に「友達は眠ってしまったから、一人でちょっと散歩してくるわ」と声をかけると、傍にいた男が「もうそろそろ日が暮れるから気をつけてな」と言いながら、さりげない様子で私の腰に手を触れた。

その瞬間私の頭の中ではピー！！と激しく警報機が反応していたが、気にとめない様子のままその場から歩き去るとゆっくり小さな広場を横切り林の中に入った瞬間、私は再び猛ダッシュで洛絨牛場の方角に走り始めた。「早く！早く！早く！！」暗い林の中でぬかるみに足をとられ、木の根につまづきながら、息の続く限りできるかぎりの速さで。いったい今日ってどういう日なのよ～！！

朝からの行動を考えると、何故今自分が林の中を走れる体力があるのか自分でも判らなかった。これが火事場の馬鹿力という奴だろうか。泣き出したい気持ちで洛絨牛場まで駆け戻った時にはあたりは既に薄暗くなりかけていた。真っ直ぐ先程の牛番小屋に駆け込むと、老女と女の子に赤ちゃん達が暖かく燃える囲炉裏の炎に照らされてオレンジ色に顔を光らせ団欒している様子に一気に心の緊張が緩む。

あ～、こっちだったら安心して泊まることが出来る。

私は家主の老女に向かって言った。「お願い。やっぱり今晚泊めてください！！」

しかし老女は首を振った。

「何で！？さっきは良いいって言ったのに！！」

「管理人が来る」

先程出会った制服の男の言葉が脳裏に甦り、だんだんと事情が飲み込めてきたような気がした。だが今はそれで諦める訳には行かないのだ。私は必死に頼み込んだ。

「今はこの先の小屋にいるのだけれど、あそこは男しかいないのよ。怖くて泊まれないわ」

それでも老女は首を振る。

「男はスケベでしょ？私達女でしょ？危ないでしょ？」

少ない中国語の語彙でたどたどしくも必死に話す私の言葉を女の子は面白そうに目をキラキラさせながら聞いていた。暫く頼み続けると、とうとう老女は指を三本立てて言った。「30元だよ」え？さっき来た時は10元だったはずじゃ・・・

「二人で30元でしょ？いいわよ」

私がカマをかけたが、老女は首を振り一人30円でなければ泊まらせないと。人の弱みに付け込んでボッタクリとは全く・・・だが状況はすでにお金の問題ではないのだ。とにかく泊まらせてもらえるだけでありがたかった。料金の交渉は後でウィンにやらせよう。「判ったわ。それじゃあ今から友達を連れて戻ってくるからね」

そういい残すと私は再び林の中に走り込んだ。この後荷物を担いで再び戻ってこなければならぬのかと思うとウンザリだった。最初からここに泊まっていれば、何の問題もなかったのに。そう思うとウィンが恨めしい。

すでに林の中はかなり暗かった。完全に日が暮れきる前に戻ってこないとな林の中など歩けなくなってしまう。「早く！早く！！」いずれにしても走るのはこれで最後だ。安心して今晚泊まれるのだ。自らを励ましながらかクガクの足をよるめかせながら林の中を走った。今日一日でどれだけ無駄に走り回ったのだろう。

息を切らせながら男達の小屋に戻るとソツとした。二人だと思っていた男が三人に増えていたのだ。後から加わった少し年若い男が興味深そうに私の顔を見てニヤニヤしていた。私は平静を装うとすすめられたお茶を断って「友達の様子を見てくるから」と離れに駆け込み、熟睡しているウィンに荒っぽく揺すった。

「ウィン！ウィン！起きるのよ！！早く荷物をまとめて！！ここを出るよ！！」

深い眠りを突然妨げられ何が起きたのかわからずボンヤリしているウィンにシュラフから追い出すと、乱暴に丸めてザックの中に突っ込んだ。早く行かないと日が暮れて

歩けなくなってしまう！！

「ウィン！！早くして！！」悲鳴のような声を上げながら最大限のスピードで荷物をまとめザックを背負うと表に飛び出した。様子を見るためか外に出てきた男に適当にでっち上げた理由を告げる。

「ごめんなさいね、私さっき散歩に行ったら管理人に怒られちゃったの。ここに泊まることは出来ないから沖古寺に戻りなさいって」

男はせっかくの金づるを取り逃がすことになりそうだと慌てた様子で私に尋ねた。

「どこで管理人に会ったんだ？」

「洛絨牛場よ。さっき散歩に出た時洛絨牛場まで行ったの。管理人に見つかって何処に泊まるんだと聞かれたからこの事を話したら怒られちゃって、ここに泊まるのは許さないから沖古寺に行きなさいと言われたの」

「ここに泊まるって管理人に言ったのか？」

「そうよ。だから私達沖古寺に行かないと、ここに管理人が来て怒られるわ」

事前に考えていた訳でもなかったのに、良くまあスラスラとうまい嘘が言えたのものだと自分でも感心するくらい滑らかに喋っていた。そう言われては男達も引き止めることも出来ずに、釣り上げた大きな魚に糸を切られたような顔をしてぼかんと私達を見送っていた。

再び大きな荷物を背負いヨロケながら最大限のスピードで林の中を抜け、私達がほうほうのていで洛絨牛場にたどり着いた時には辺りはすっかり暗くなっていた。

(続く)



ルオロンニューウジャン
亜丁・洛絨牛場の放牧者の小屋
2004年7月撮影